

キリスト教・三位一体論の遊牧民的起源

——イヌの《仲介者》化によるセム系一神教からの決別——

中川 洋一郎

はじめに——キリスト教の真髓としての三位一体論——

- I. 群居性草食動物の管理には、第三の動物が不可欠
 - II. インド・ヨーロッパ語族民におけるイヌ
 - III. ヨーロッパ・キリスト教世界における《仲介者》
- おわりに——セム系一神教からの決別——

はじめに——キリスト教の真髓としての三位一体論——

キリスト教は、三一神を標榜している。すなわち、父なる神と、子なる神（イエス・キリスト）と、聖霊なる神というように、神は位格（ペルソナ）としては三神であるが、これらの三神は、実は、一神であるという教義を信じている。キリスト教における神のこの神学的な表現が三位一体論（英語では、the Trinity）である。西方キリスト教において、三位一体論は、教義の真髓の中の真髓である。キリスト教徒にとって、三位一体論は、信仰の核であり、この教義を信じない者は、キリスト教徒ではない。キリスト教世界では、その生成以来、今日までおよそ2千年間、この教義を維持するために多数の人々が参加して、執拗な議論と膨大な研究が蓄積されてきた。血で血を洗う凄惨な闘争も繰り返されてきた。

しかし、ひとたび信者の立場を離れると、事態は一変する。三位一体論は、通常の理屈では理解できない主張によって支えられており、人智を超えた理解を強いているので、信者以外の人間には通用しない議論である。端的に述べると、確かに三位一体論は、西方キリスト教の信者には真理であろうが、しかし、その信仰なき者には、理解不可能な、真に奇妙な言説である。

さらに特筆すべきことに、一神教を信仰し、同じ聖書を聖典とするユダヤ教徒・イスラム教徒にしてからが、三位一体論は、唯一神を否定し、多神教を容認しているという点で、一神教から外れた邪教の極みであると、見なしている。それゆえ、彼らからの激しい反発と彼らに対するキリスト教徒からの攻撃の原因となっている。キリスト教徒とユダヤ教徒の2千年に及ぶ激しい対立、キリスト教徒とイスラム教徒の修復不可能とも見える深刻な抗争、それらの原因・起源のひとつにこの教義がある。かくて、三位一体論という、かかる非キリスト教徒にとっては理解困難で、奇妙な言説が、キリスト教では、その信仰の真髓と位置づけられ、定着し、普及してきたのである。それ

は、なぜか。また、その現実的な根拠は何か。

この場合、三位一体論は、ひとえに「神であり、人である」イエスの存在そのものに関わっている。三位一体論が成立しないと、イエスは、神性を剥奪され、一人の人間として、数多くいた単なる予言者の一人にすぎないことになる。「イエスの神性喪失」は、信者たちにはキリスト教の基盤そのものの崩壊であったから、到底受け入れられなかったのである。

そもそも、この問題は、遊牧によって引き起こされた組織編成原理史上の大転換に深く関係している。新約聖書において、イエスがあたかも牧夫であるかのように描かれている個所がいくつもある。それらの描写では、イエスは、人々に対して、大規模なヒツジの群れを優しく世話して、大人しいヒツジたちを守り、育て、良き道へと導くという牧夫の役割を果たしている。

牧畜が開始したのは、およそ前6千年頃であり、それから1千年後の前5千年頃に、メソポタミア周辺の乾燥地帯で、遊牧が始まった。もちろん、よく知られているように、史上初の本格的な一神教であるユダヤ教が形成されたのは、この遊牧開始から4千年以上後の前1千年紀前半、そこからキリスト教が分かれたのは、さらに5百年以上のちの紀元前後、また、イスラム教の成立は、さらに6百年以上のちのことであった。すなわち、一神教が生成した時、遊牧という生業が、すでに4千年以上にわたって営々とその現実的基盤をつくってきた。

ところで、遊牧においては、一人あるいは少数の牧夫が、数百頭の家畜群を抱えて、草原をあちこち遊動しているが、これら二種の動物（ヒトと家畜群）の他に、牧夫を補助する「第三の動物」が必要不可欠である。これら補助動物は、牧夫が騎乗するウマ・ラクダと、牧夫の指示を家畜群に伝達することで、牧夫による家畜群管理を補助する《仲介者》に二分される。さらに、《仲介者》には、(1) 受動的《仲介者》である去勢ヒツジ・ヤギ、(2) 能動的《仲介者》であるイヌの二種類がある。この能動的《仲介者》こそ、組織編成原理史上の分水嶺を引き起こした。

旧約聖書がユダヤ人によって作成されたことは、改めて述べるまでもないが、新約聖書もまた、ユダヤ世界の中で形成された。そこで描かれたイエスは、大人しい迷えるヒツジたちを優しく世話して、正しい道へと先導する慈悲深い牧夫である。それは、家畜群の先頭に立って、去勢ヒツジ・ヤギに指示を出すことで、付和雷同性の強いヒツジたちを領導するユダヤ・イスラム教型の牧夫である。これを組織として見ると、牧夫に対して、去勢ヒツジ・ヤギは、受動的《仲介者》として、家畜群と同じカテゴリーに属するので、牧夫・ヒツジ群という、二階層構造になっている。イエスと信者たちとの関係が、あたかも牧夫とヒツジたちとの関係として新約聖書に描かれたことは、キリスト教徒にとって、等閑視できない重大な事柄である。聖書は神の御言葉であるから、その記述に逆らうことは許されないのである。

一方、前4千年紀の半ば頃までに、黒海カスピ海北方ステップで、原インド・ヨーロッパ語族民が部族として形成されていた。狩猟採集民を出自とする彼らは、メソポタミアを起源とするオリエントの農牧文明から牧畜を習得し、ステップでの綿羊の大量飼育に乗り出していた。彼ら原イン

ド・ヨーロッパ語族民による遊牧においては、《仲介者》としてイヌを活用することが重要な特徴であった。イヌを補助動物として活用することは、去勢ヒツジ・ヤギを補助動物とするのとは決定的に異なっている。イヌは、ヒツジにとって、オオカミを祖先とするそれは恐ろしい天敵である。イヌとヒツジが同じカテゴリーに属するはずがない。当然、この組織は、《牧夫→イヌ→ヒツジ》という、三階層構造を形成している。原インド・ヨーロッパ語族民は、能動的《仲介者》であるイヌに、自らの部族としてのアイデンティティーを求めていた。なぜなら、能動的《仲介者》こそ、彼らの標榜する「自由」の源泉だと考えたからである。

原インド・ヨーロッパ語族民は、部族毎に、前4千年紀から前2500年頃までにかけてステップから四方に拡散していった。そのうち、ギリシャに侵入したインド・ヨーロッパ語族民は、メソポタミアとエジプト由来の現地の文明と混交しつつ、前1千年紀に高度な古代文明を建設した。地中海東岸地域でギリシャ・ローマ文明が栄えていた頃、パレスチナで生成した原始キリスト教が、当初のユダヤ人世界から外にも浸透して、異邦人たちにも拡散し始めた。この時に問題となったのが、もちろん、「イエスは神なのか、人なのか」という、イエスの人性・神性をめぐる教義そのものである。

しかし、この時、教義の懸念の背後に、組織編成原理の転換を促す重大な問題が生じていた。旧約聖書・新約聖書に盛られた牧夫・ヒツジ関係は、組織の二階層構造を想定し、前提としている。一方で、インド・ヨーロッパ語族民の独自性とは、《仲介者》にイヌを採用したことであり、その結果、組織は三つの機能に分かれて三階層構造になる。つまり、「イエスの人性・神性いかに」という難題の他に、この時に生じていたのが、聖書の記述（二階層構造）とインド・ヨーロッパ語族民に固有の組織編成原理（三階層構造）との矛盾である。

一神教徒として、キリスト教信者にとって、聖書に盛られた神の言葉は絶対的である。しかし、そこに書かれた言葉に従うと、イエスの神性が喪失するばかりか、三階層構造の組織の中で「自由」を享受している真の《仲介者》をも失うことになる。三位一体論とは、かかる聖書の理念（二階層社会）と自分たちが望ましいと考える組織のあり方（三階層社会）との齟齬・矛盾を解決するために案出された理論ではなかったのか。

I. 群居性草食動物の管理には、第三の動物が不可欠

なぜ、三位一体論という、かかる非キリスト教徒にとっては理解困難で、奇妙な言説が、キリスト教では、その信仰の真髄と位置づけられ、定着し、普及したのであろうか。それは、遊牧によって引き起こされた組織編成原理史上の大転換に深く関係している。本稿で言う《仲介者》の出現、とりわけ、イヌが能動的《仲介者》となったことで、疑似親族原理から機能本位原理が生成したことが、組織編成原理史上、分水嶺となった。それは、原インド・ヨーロッパ語族民が遊牧を開始し

た時に起きた。

1. 牧夫を補助する第三の動物

遊牧民は、草原地帯（ステップ）で数百頭の家畜群（例えば、ヒツジ）を抱えて飼養する。家畜飼養を生業とする遊牧民と家畜からなる集団をひとつの組織と見なすと、この組織には、三種の動物がいる。①ヒト、②ヒトを補助する動物、③家畜群（群居性草食動物、中でも、ヒツジ）である。ヒトは、牧夫とその家族しかいない。牧夫の家族は、小規模（平均4人から5人）の親族組織からなる。しかし、この牧夫家族だけでは、遊牧組織は成立しない。遊牧組織が成立するためには、牧夫の親族組織の他に、当然、家畜の大規模な群れ（数百頭）が必要である。家畜なき牧夫の家族は、草原をうろつく浮浪者の一団にすぎない。

しかし、人間だけで数百頭のヒツジの群れを思いのままに動かすことは不可能である。これまでいくつかの拙稿で検討したように、草原地帯における遊牧では、牧夫と家畜群の他に、もう一種の動物、すなわち、大量の家畜を警護・制御するために、牧夫の手助けをする第三の動物（ヒトでもなく、ヒツジでもない）が必要である。アーノルド・トインビーが、遊牧におけるこの「第三の動物」の重要性について、夙に指摘していた。

われわれはすでにアヴァル族や、それに似た遊牧民族が、砂漠から農耕地帯に侵人したとき、それまで《羊を牧する者》であった彼らが《人間を牧する者》に変わることによって新しい状況に対処しようと企てて失敗したのを見た。農耕世界におけるこれらの失敗した遊牧民帝国建設者たちが、ステップの複合社会の本質的協力者に代わる者を、定住的住民の中に求めようとしなかったことを考えると、彼らの大敗は驚くに当たらないように思われる。なぜなら、このステップの社会は、人間の牧羊者とその羊群だけで成立しているものではなかったからである。遊牧民は生命を維持するために飼う家畜の他に、馬・駱駝・犬を飼っている。そして、これらのものの役目は、羊や牛のように食料や衣料を供給することではなくて、牧畜の仕事を助けることである。これらの補助的な動物は、遊牧民の傑作であり、それが彼らの成功の鍵であった。彼らの力を借りなければ、遊牧民の離れ業の強行は人間能力の及ぶところではない。しかも、人智の奇蹟によってのみ、この補助者を動員することができるのである。羊や牛は人間の役にたてるために（相当に困難ではあったろうが）、単に飼い慣らせばいいのであるが、犬・駱駝・馬は複雑な仕事をさせるためには、飼い慣らすだけでなく、訓練しなければならぬ。彼らが非人間的協力者を訓練したことは、遊牧民の最大の功績である（トインビー 1970 : 43）。

ここでトインビーが明快に説明しているように、時には1000頭にも上る大規模な家畜群を、人間

表1 遊牧組織における補助者としての第三の動物—受動的《仲介者》と能動的《仲介者》—

三種の第三の動物			《仲介者》		
1	ウマ・ラクダ	騎乗動物	牧夫が騎乗する		
2	去勢ヒツジ・ヤギ	非騎乗動物	牧夫は騎乗しないで、指示を出す	受動的《仲介者》	家畜群と同じ種
3	イヌ			能動的《仲介者》	家畜群とは異なる種・捕食動物（天敵）

注) 遊牧において、大規模な家畜群を統御するためには、牧夫であるヒトと、家畜群（ヒツジなど）の他に、第三の動物が牧夫の補助者として必要不可欠である。その第三の動物は、三つの種類に分類できる。そのうちの非騎乗動物は《仲介者》として機能するが、《仲介者》は受動的・能動的と二つに分けられる。
出所) 筆者作成。

が徒歩で管理して、思いのままに操ることは、身体能力の面から不可能である。そこで、大規模な家畜群を統御するために、ヒトでもなければ、家畜群に属するわけでもない、「第三の動物」が遊牧民によって開発された。かかる「第三の動物」が果たす役割は、牧夫が大規模な家畜群を管理できるように、牧夫を補助することである。この「第三の動物」は、牧夫の人間的な能力を補う役割の動物と、牧夫の意思を家畜群に伝達する役割の動物に大別される。さらに、後者の「牧夫の意思を家畜群に伝達する役割」を果たす動物（ヨーロッパ人たちは、このカテゴリーに属する第三の動物を、一般に、《仲介者》¹⁾と呼んでいる）には、家畜群を出自とする動物と、全く異なる動物とに細分される。

ウマの家畜化は、ヒトに大きな便益をもたらした²⁾。中でも、ウマへの騎乗によって、ヒトの肉

1) 牧夫の指示を受けて、家畜群に対して、その指示を伝達する役目を担う者を、欧米のキリスト教諸国では、一般に《仲介者》と規定している。《仲介者》は、英語では mediator, フランス語では médiateur, ドイツ語では Vermittler と表現される。この《仲介者》という規定は一神教文明に独特であり、キリスト教と色濃く結びついていることもあってヨーロッパの伝統的な組織観において、重要な意義を持っている。後述のように、キリスト教諸国では、これらの言葉は、往々にしてイエス・キリストを指す。イエスを指す場合、日本語訳として、仲保者もしばしば使用される。なお、本稿で《仲介者》を論じるに当たっては、これまで筆者が発表してきた論稿（中川 2017a：350-359; 中川 2017d：106-111, 117-122など）から修正のうえで適宜引用していることをお断りしておく。

2) 加茂儀一は、畢生の大著『家畜文化史』において、家馬（家畜化されたウマ）について、およそ280頁を費やした記述の末尾に、いささかの情感と多大の愛情を込めて、次のように記している。「以上において家馬の歴史は終わった。いささか家馬については長く書いたが、実際は家馬の歴史は他の家畜種の歴史に比して、人間生活とより密接な関係があったからであって、これだけでもまだ足りない。もしもっと興味の観点を変えて書くとすれば、おそらく数冊を要するであろう。とまれ、馬ほど人間にとって親しいものはない。おそらく人間との親しさの点では、犬よりも勝っている。そしてまた伶俐な点でも、動物の中で最上の部類に属しているであろう。一面ではこの動物は非常に臆病であるが、他面では乗り手を信頼する生まれつきの性質をもっている。したがって戦場において、馬が砲煙弾雨の中を乗り手の命に従って突進して行くのは、けっして馬に勇気があるからではなく、馬が乗り手を信頼するからであり、騎者に自己の身を託しているからである。騎馬術の第一の秘訣は、馬の臆病を矯めることではなくて、馬をして乗り手を信頼させることである。モーコ人が騎乗に巧みなのも、生まれてから死ぬまで彼

体的な行動力が大幅に向上した。騎乗によって、速度・持久力・俊敏性が、飛躍的に向上したからである。騎乗すると、徒歩に比べて、速度が10倍になり、行動範囲も4～5倍に伸びる（DUCHESNE 2009b: 17）。騎乗による行動の迅速性・範囲は絶大であるので、牧夫は、より大きな規模の群を管理できる。徒歩では、牧夫ひとりで100頭しか統御できないが、騎乗によって、1300頭まで統御できるようになった（ただし、いずれも、「イヌ一匹の補助を得て」という条件のもとにであるが）（ANTHONY 2007）。騎乗が寄与したのは、牧夫の肉体的な行動力の向上であるから、ウマ（およびラクダ）への騎乗は、牧夫の能力の、いわば同質的で、量的な向上である。

牧夫の肉体的な能力を向上させるウマ・ラクダなどの騎乗動物に対して、《仲介者》と呼ばれる非騎乗動物は、牧夫の意思を具体化することで家畜群の統御を可能にするという点で家畜群管理に大きく寄与している。牧夫の指示に従って、家畜群を警護・制御するのが、《仲介者》の役割である。

すでに見たように、牧畜専門という遊牧において、牧夫は、多数のヒツジを飼育するために第三の動物を開発した。第三の動物なくして、群居性草食動物を飼育することは不可能である。従って、この遊牧組織には、牧夫を補助する役割を果たす第三の動物が組織の構成メンバーとして、絶対に欠かせない。少数の支配者が多数の被支配者を管理するのは難しいので、遊牧民は、少数の牧夫で動物の大きな群れを管理するために、補助動物、とりわけイヌや誘導ヒツジなどの《仲介者》を利用する技術を開発したのである。

先に引用したように、トインビーが、第三の動物を開発したことは遊牧民の「最大の功績」（トインビー 1970: 43）と述べていた。しかし、トインビーは、「第三の動物」を論じるに当たって、ヒトを補助する役目を担う動物として、全体をひとくくりしている。人が騎乗できるほど大型の騎乗動物（ウマ・ラクダ）と中型の《仲介者》動物（去勢ヒツジ・ヤギ、あるいはイヌ）とを、明確に区別していない。ウマ・ラクダが人間生活・経済に及ぼした影響とその意義は絶大である。特に騎乗の意義は大きい。しかし、組織編成原理という視角から見ると、次項で見るように、《仲介者》動物、中でも、イヌが果たした役割とその意義は決定的であった。

2. 遊牧三階層構造における《仲介者》の二つの類型—受動的・能動的—

牧夫が騎乗して行動力の向上をはかるウマ・ラクダなどの騎乗動物に対して、牧夫が騎乗するのではなく、牧夫からの指示を受けて家畜群管理を補助する動物を、ヨーロッパ人たちは、往々にし

らが馬と全く離るべからざる生活をし、馬を見ることわが子と同様なためであるにほかならない。馬ほど人間に対して忠実な家畜はいない。原始人は人間に対して得られなかった忠実の観念を馬から得たに違いない。そうしたことが馬に対する人間の愛着をよりいっそう深めたのであろう。もちろん馬は他面強情な性質をもっているが、その性質を矯めて人間の命令に絶対服従させることに馬の訓練の目的があったのである」（加茂 1973: 457）。

て、《仲介者》と呼んできた。《仲介者》とは、全体を統括して指示を出す者と、組織の成員として管理される者たちの中間に介在して、統括者の指示を被管理者たちに仲介する者という意味である。遊牧における典型的な《仲介者》は、①受動的《仲介者》（去勢牡ヒツジ・ヤギ）か、あるいは、②能動的《仲介者》（イヌ）である。しかし、同じ《仲介者》といっても、その組織編成原理上の意義において、両者は大きく異なり、原インド・ヨーロッパ語族民はイヌを《仲介者》とすることで、機能本位原理を観念化することに成功した。

1) 去勢ヒツジ・ヤギ—受動的《仲介者》—

《仲介者》が去勢ヒツジ・ヤギの場合は、牧夫は、性格の良い健康的な牡の子ヒツジを去勢したうえで手元に置いて手懐ける。牧夫は、その去勢ヒツジが牧夫による笛などでの指示に従うように訓練し、親和性を醸成する。ヒツジなど、群居性草食動物の付和雷同性が強い習性を利用して、《仲介者》たる去勢ヒツジ・ヤギを群れの先頭に立たせて、その《仲介者》を指示通りに動かすことで、群れ全体をコントロールするのである³⁾。セム系の遊牧民には、《仲介者》として去勢ヒツジ・ヤギを使用することが多い。《仲介者》が去勢ヒツジ・ヤギの場合、群れとなっている家畜であるヒツジとは同じカテゴリーに属している。

去勢は牡を人為的に減らして群れの混乱を回避し、併せて優生学上、優れた血統のみを残すことによって遺伝的に品種を改良するという機能を持っている。去勢には、さらにもう一つ重要な機能がある。上記のように、牡の誘導羊の育成である。谷（1987）によると、地中海地域の牧夫は、種牡候補に残された子羊の中から、特に性格の良い牡を2～3歳の頃に選別し、去勢する。牧夫は、この去勢子羊には、固有の名前を付け、いつもペットのごとく連れ歩き、牧夫の口頭での指示を理解させるべく特別の訓練を施す。牧夫とこの去勢牡との間に親和性が生まれ、牧夫の指示を理解できるようになると、去勢牡は群れの中に放たれるが、ヒツジはその群居性から、その群れの先方にいる個体の行動に追随するという性質を持っているので、牧夫がその去勢牡に指示を出して、ある行動を取らせて誘導すると、残りの群れがそれに従って動くのである。

2) イヌ（狩猟犬・警護犬・牧羊犬）—能動的《仲介者》—

イヌは、最初に家畜化された動物である。イヌは、もともとオオカミが手懐けられて、家畜化され、イヌとなった。3万5千年前の中石器時代に家畜化されたというのが定説である。当時は、ヒトが狩猟採集を行う手助けとともに、夜間などヒトの周囲にいて、不審な肉食動物が接近するのを

3) 群居性草食動物の家畜化において、牡の去勢ヒツジが、《仲介者》として、いかに重要な役割を果たしているのかは、現地での実態調査に基づく、谷泰の一連の論考で詳細に明らかにされている。その代表作である谷（1997）を始め、ヨーロッパ文明における牧畜の意義を知るのに、極めて有益な業績である。

防ぐ役目を果たしていたと想定される。狩猟犬という最初期の役割から発展して、牧畜の際には家畜群を外敵から守る警護犬としての役割を担い、やがて、中世ヨーロッパでヒツジ群を誘導する誘導犬となった⁴⁾。

かくて、イヌは中石器時代からヒトの側にいたので、古代メソポタミアでもイヌの存在は、当然のように確認されている。例えば、ウル第三王朝（前22から前21世紀）におけるヒツジ飼養に際しても、イヌが国家によって活用されていたので、イヌの活用は、なにもインド・ヨーロッパ語族に限ったことではなく、ウルを始めとしてメソポタミアにもいたことは、確実である。しかし、当時、ヒツジの飼養におけるイヌの役割は大きかったはずだが、楔型文字による資料におけるイヌの記述自体は非常に少ない（ADAMS 2006: 156）。

新バビロニア（前625-前539）でも、今に残っている多くの図象からいくつかの種のイヌがいたことが分かる。古代犬（原生種のイヌか）は、どこにでもいた。牧畜犬として、マスティフ、テリア、セルキもいたので、新バビロニアにおけるイヌは、何よりも、警護犬・番犬の役割が普通だった。中東でのイヌのイメージは、肯定的でもあり、否定的でもあるので、双義的である。しかし、全般的には、イヌは、貪欲で陰険という印象を持たれていた（VILLARD 2000: 235-257）。

イヌが文字として残された事例は、ヒツジの群れを外敵から守るという警護犬として、前1世紀に遡る⁵⁾。アリストテレス『動物誌』第9巻⁶⁾とウエルギリウス（70-19BC）『*Georgics* 農耕詩』⁷⁾によると、ギリシャのエピロス地方のモロシア人がヒツジ群の警護犬（モロスス犬）を活用していた（加茂 1973: 135）。モロスス犬は、今では絶滅してしまったが、今日の警護用に活用されるイヌ

4) イヌに関して、動物学、家畜学など、生物学的な見地からだけでなく、家畜文化学、歴史学、そして現代では、人に与える癒やし効果など心理学、さらには、昨今急速に発展している遺伝子学など、広範な分野で研究が進んでいる。ここでは、「遊牧が開始されると、原インド・ヨーロッパ語族民がイヌの職能に思い入れを込めて、能動的《仲介者》という認識を持ったことで、牧夫→イヌ→ヒツジによる三階層構造が形成された。それが人間の組織編成原理史上、分水嶺となった」という本稿での問題意識から、限定された視角からイヌの問題に言及している。なお、家畜としてのイヌについては、ウマの場合と同様に、加茂儀一（1973）『家畜文化史』が広範な資料・文献の読破に基づいて、蘊蓄を傾けて家畜としてのイヌを縦横無尽に語っていて圧倒的である（加茂 1973: 67-155）。

5) 「[ローマの属州期のガリアで] イヌがどのような職務で活用されていたのかを大まかにでも知ることは不可能である。ローマ時代の資料（Columelle, 7,12 ; Varron, 2, 9 ; Virgile, *Georg.*, 3, 44）には、盛んに牧畜犬について言及されている。しかし、狩猟犬との明確な区別がされていたかどうか不明なので、現場で実際にどのような働きをしていたのかも、また、現代のどのタイプのイヌと結びつくのかを正確に決められない」（LEPETZ 1996: 99）。

6) Aristotle (350 B.C.E) *The History of Animals*. Translated by D'Arcy Wentworth Thompson, Book IX, Part 1. http://classics.mit.edu/Aristotle/history_anim.9.ix.html

7) ウエルギリウス『農耕詩』第3巻（下記文献の92-93頁）に、スパルタ犬は狩猟に適し、モロスス犬は警護に適しているとある。Virgil (1905) *The Eclogues and Georgics of Virgil Translated From the Latin by J.W. MacKail Fellow of Balliol College Oxford*. London, 119.

は、モロスス犬の子孫ではないかと考えられている。

牧羊犬の最も古い形態は、ヨーロッパでは青銅器時代にまで遡るが、「今日牧羊犬と呼ばれている家犬の大部分はこの青銅器時代犬の系統をひいている」。より原始的な形態のものがエジプトの先史時代のイヌのミイラに見出されるし、前4300年頃のトルキスタンからも原始的な牧羊犬の頭骨が出土している。古代エジプトやトルキスタンには古くから牧羊犬がいたらしい。その馴化の地はイランと考えられている（加茂 1973：125-127）。

前4千年紀末、原インド・ヨーロッパ語族が黒海・カスピ海北方ステップで大量のヒツジを飼養し始めた時、すでにイヌが牧夫の傍らにいたのはほぼ確実である。この場合は、恐らく群れをオオカミなどの害獣から守るための牧畜犬・警護犬としての役割を果たしていた。いずれにしろ、新石器時代になってヒツジが家畜化されると、その飼養においてイヌは何らかの役割を果たしていたはずであるが、例えば、上記のように、新バビロニアでのイヌの役割は、主として警護であり、ヒツジ群の誘導まではしていなかったと考えられる（VILLARD 2000: 239-240）。

誘導犬によるヒツジ群の誘導技能は、12世紀から13世紀頃に北ヨーロッパ中世で確立されたようなので、古代の遊牧において、どの程度までイヌが誘導機能を発揮していたかはわからない。しかし、特に、ヒツジが放牧対象になる場合、イヌによる何らかの補助（家畜群と牧夫家族の警護）は不可欠な機能であった⁸⁾。

いずれにしろ、群居性草食動物が家畜化されて以来、長い間、イヌが補助的な動物として重要な役割を果たしてきたことは確実である。その場合、イヌの主要な役割は、オオカミなどの害獣からヒツジ群を警護し、牧夫家族の安全を確保するという、番犬の役割であっただろう。

オオカミ（イヌの祖先）はヒツジの恐ろしい捕食者である。ヒツジの群れは、恐ろしいイヌに追いついて、群れとして動かされる。表1、および、後述の図1における「能動的《仲介者》」で示したように、この組織において、イヌは、家畜群（ヒツジなど、群居性草食動物）の群れとは明らかに異なるカテゴリーに属している。その結果、ここでは、《牧夫（ヒト）→仲介者（イヌ）→家畜群（ヒツジ）》という、機能を異にする三種の動物が三階層構造をつくっている。一方、《仲介者》が去勢ヒツジ・ヤギの場合、去勢されているとは言え、彼らは、明らかにヒツジたちの群れと同じカテゴリーに属している。従って、遊牧補助のための《仲介者》において、イヌは、去勢ヒツジ・ヤギとは別のカテゴリーに分類されるのが、妥当である。

8) 「イヌが、今日のヨーロッパで見られるような非常に洗練された技能を有する牧羊犬となったのは、中世（13世紀以降）のアイスランドであり、それ以降、牧羊犬としての業務は西ヨーロッパに広まった。その理由は二つある。（1）西ヨーロッパからオオカミがいなくなったので、あえて警護用の大型犬ではなく、俊敏な小型犬の利用が可能になった。（2）開放耕地制が展開して、土地が狭い地条によって細分化された結果、家畜群を狭い通路を辿って、正確に誘導する必要が生じた」（PLANHOL 1969: 365-368）。

II. インド・ヨーロッパ語族民におけるイヌ

1. インド・ヨーロッパ語族民神話におけるイヌの意義

青銅器時代のインド・ヨーロッパ語族民の遺跡からは、イヌの化石が掘り出されている。ボタイでは、住居の跡地において、イヌの骨が住居の西側で見つかっている。家の周りに埋められていたイヌは、家を悪霊から守るためであったと考えられている。また、儀式の際に供犠としてイヌが犠牲にされた。ウクライナの銅器時代のデレイフカ遺跡でも、家の近くに埋められたイヌの骨が発見されている。家の警護という機能を果たしていたのであろう (PETERSON *et al.* 2006: 107-108)。

ヴェーダやアヴェスタなどのインド・ヨーロッパ語族の文献にもイヌと西（方位）とが結びつけられて、重要な意義を与えられていた。

前1千年紀におけるインド・ヨーロッパ語族のリグ・ヴェーダ、インド・イラン語族のアヴェスタなどの宗教的な文言において、来世は西方にあり、イヌたちは、そこに至る門を警護していると見なされていた。ユーラシアにおいて、後の時代に、なぜ、西が来世の方向だと考えられたのだろうか。多くの文化を通じて、神なる太陽は毎日東から西へと天空を横切り、その間に年を取って、日没と共に西の方向で消滅するというのが、共通の主題であった。イヌたちと西との精神的なつながりは、この地域で少なくとも銅器時代にははっきりと形成されていた (PETERSON *et al.* 2006: 108)。

インド・ヨーロッパ語族にとって、イヌたちは、現実の世界において家や家族を外敵から警護する警護者として伝統的な存在であり、頻繁な想起対象となっていた。それだけに精神世界においてもまた、イヌは、守護者としての役割を与えられてきた。その結果、ヴェーダにおいて引用文は多数に上る (PETERSON *et al.* 2006: 108)。

イヌはインド・ヨーロッパ語族民にとって、冥界への門の守り役となっていたように、精神世界でも重要な役割を担っていた。イヌは、インド・ヨーロッパ語族民にとって、特別な存在であった。イヌは、もちろん、ユダヤを含むセム・アラブ社会にもいたが、そこではイヌを軽んじ、軽蔑していたので、この点で大いに異なる。旧約聖書の中に、ユダヤ・イスラム教型の典型的な牧夫像・《仲介者》像が描かれている。

牧羊犬はヨブ記30:1の「羊の番犬」からも明らかのように、聖書の時代にも使われていた。この族長〔ヨブのこと〕の語る様子から、トムソン（『聖地と聖書』p. 202）も述べているように、東方の牧羊犬は、英国の牧羊犬とはかなり異なっていることがわかる。今も現存する

東方品種は「みすばらしい質の悪い系統であって、人に近よることはせずに、反抗的で、半ば飢えていて、高貴なところも、魅力的なところもない」と記述されている。しかしながら、牧羊犬は、羊飼いにあって、とくに夜間は、丘陵地や谷間を徘徊する野獣を追い払うのに役だっていたに違いない(テオクリトス『牧歌』v.106を参照のこと)。パレスチナや東方の羊飼いは、ふつう、ヒツジの群れの前を行き、あとをついてくるようにヒツジたちを呼びながら導いて行く(ヨハネ福音書 10:4, 詩編 77:20, 同 80:Iを参照のこと)。しかし、彼らはヒツジたちを追い立てて行くこともある(創世記33:13)(スミス 2002:381)。

ここには、《仲介者》という役割を十全に果たすインド・ヨーロッパ語族民におけるイヌとの対比で、イスラム世界のイヌは、徹底的に差別されていて、尊敬されていなかったことが描かれている⁹⁾。イヌをめぐる、インド・ヨーロッパ語族民の思い入れと、それとは対照的なユダヤ・イスラム教徒の「イヌ観」との違いが鮮烈である。

2. 男性結社

1) 加入儀式 (イニシエーション)

インド・ヨーロッパ語族民には、青年期における加入儀式(イニシエーション)として、冬至の日に実行されるイヌを犠牲とする儀式があった。ロシアのカスピ海北方ステップのサマーラ川沿いにある前1750年頃のスルブナヤ遺跡(Srubnaya settlement of Krasnosamarskoe)で、「冬至の新年祭」の遺跡が発見された。ヴォルガ中流域で、冬至の新年祭として、イヌの犠牲祭が執り行われていた。イヌは丁寧に屠られており、犬歯のペンダントなどが発掘されたので、そこでの様子は、『リグ・ヴェーダ』で描かれていた場面にそっくりであった。インド・ヨーロッパ語族における冬至の日の儀式では、若者を戦士のカテゴリーへと導く目的がある。その象徴がイヌであり、オオカミである。少年たちは、冬至の日といったん死んで、戦士となる¹⁰⁾(ANTHONY 2007: 410-411)。

9) アラブ・イスラム世界では、一般にイヌは軽んじられて、軽蔑の対象である。しかし、そのイスラム世界においても、シーア派とスンニ派とでは、イヌに対する観念が大きく異なる。「シーア派がスンニ派と違う一つに犬の処遇がある。ペルシャのゾロアスター教は犬を神の使いとして神聖視したが、ここを征服したイスラムは帰依しないゾロアスター教徒を蔑むために犬も不浄とした」(高山 2002:51)。シーア派とスンニ派との違いはイヌの取り扱いに見てとれるという高山の記述は、興味深い。イランのシーア派は、インド・ヨーロッパ語族民系だから、ゾロアスター教経由で、イヌを尊重したというのは、そのとおりであろう。ただし、典拠が提示されていないのが残念である。一方で、セム系世界では、イヌは軽蔑されるのが一般的であったのに、すでにアッカドの文献(前670年頃)で、スキタイ人をイヌたちと呼んだうえで、「勇敢な」という、非常に肯定的な形容詞を付けていた(IVANCIK 1993: 323-324)。

10) 「この著者によって発掘されたスルブナヤ遺跡から、インド・イラン語族民(そして、おそらくは、原インド・ヨーロッパ語族民も)の儀式とステップでの考古学的な証拠とのもう一つの類似例があるという、驚くべき証拠が見つかった。厳冬期、冬至の日に行われた新年の犠牲祭と成年式である。多くのイ

2) 人狼伝説

人間がオオカミへと変身するという、人狼伝説で、記録されている最古のものが、ヘロドトスが彼の『歴史』(第4巻105)で記したネウロイ人のオオカミへの変身であろう。

この民族[ネウロイ人]はどうか魔法を使う人種であるらしく、スキュティア人やスキュティア在住のギリシア人のいうところでは、ネウロイ人はみな年に一度だけ数日にわたって狼に身を変じ、それからまた元の姿に還るといふ。私はこのような話を聞いても信じないが、話し手は一向に頓着せず、話の真実であることを誓いさえするのである(ヘロドトス 1972: 204)。

伊東一郎は、この点に関して、「ヘーロドトスの記述しているネウロイ人の人狼伝説は、前五世紀に少なくともスラヴ、バルト民族のいずれかに人狼信仰が既に存在していたこと……[さらに]スラヴにおいても呪術師の、あるいは呪術師による変身というモチーフに先行して定期的な変身というモチーフが存在したこと。……この変身の周期性は、ある種の儀礼の存在を予想させる」と述べている(伊東 1981: 776)。

墳丘墓に埋葬されたイヌは、オオカミの意味上の代替か、あるいは、より可能性が高いのだが、インド・ヨーロッパ語族民の史料で書き残されている儀式の考古学的な証拠であろう。これらの儀式では、イヌは「狼男のような神の戦士」(werewolf-like god-warrior)として犠牲にされた(PETERSON *et al.* 2006: 287)。加入儀式で自分たちをイヌ・オオカミと同定して、勇敢な戦士として自覚するのが儀式の目的である。インド・ヨーロッパ語族では、イヌを「オオカミの如き勇猛果敢な戦士」になぞらえていた。

3) 男性結社と周辺集落への襲撃

スウェーデンのヴィカンデルが提起したインド・ヨーロッパ語族民に特有の「男性結社」は、独身男性たちが組織化して結社を組んで、周辺の地域の他部族・他民族へと侵攻するという、伝説的な慣習である。加入儀式・人狼伝説によりオオカミに変身した若者集団が、凶暴なオオカミとして

インド・ヨーロッパ語族民の神話と儀式はこの行事に言及している。この儀式の機能の一つは、若者たちを戦士カテゴリー(Männerbünde, korios)へと導くことであり、その主要なシンボルがイヌあるいはオオカミであった。多数の、あるいは多頭のイヌ(Cerberus, Saranyu)が冥界の入り口を警備していたというように、イヌは、死を象徴していた。成年儀式では、死が旧年と少年期ともに訪れ、少年たちは戦士となって、死の犬たちに給餌をすることになる。リグ・ヴェーダでは、冬至の犠牲式の際に執り行う戦士兄弟の宣誓は、Vrātyas、すなわち、イヌ司祭(dog-priests)と呼ばれていた。この儀式は、詩の吟唱や二輪戦車競走など、いろいろな内容を含んでいる(ANTHONY 2007: 410)。

近隣・遠隔集落への襲撃を実施するのである。若者たちの集団は、「イヌとの自己同一」「略奪行為の奨励（通過儀式として）」という特徴を持っていたので、イヌおよびオオカミへの変身と結びついていた（ヴィカンデル 1997）。

遊牧民にとって、家畜は比類のない財産価値がある。特に独身青年が嫁を得るために、家畜を所有することは有益であった。このような習慣は、若者たちが暴力集団を組んで周辺部族を襲撃することへと促すのは当然であったろう。原インド・ヨーロッパ語族民がステップで生活していた青銅器時代に、近接の農耕民と平和裏に交易を行う一方で、収奪を目的に少数の若者たちで集団的な略奪行に出撃していた。原インド・ヨーロッパ語族民の加入儀式では、あたかもイヌ・オオカミのバンド（組織集団）のごとく、村落の外に出て略奪行為をすることが奨励されていた。さらに、神への犠牲の対価として、ほかの家畜を略奪することが正当化されていた（ANTHONY 2007: 239）。

若者らの地域暴力団は、徒歩ならばトリポリ文化の近隣部族を襲撃して、友好関係を破壊するだけだったが、騎乗していたので遠方の部族を襲撃できた（ANTHONY 2007: 239）。原インド・ヨーロッパ語族民の若者からなる地域暴力団による襲撃は、まだ本格的な職業的軍隊が形成されるまでの原インド・ヨーロッパ語族民による略奪形態であったが、しかし、この形態では、のちの鉄器時代の騎馬民族による洗練された軍事組織に比べて、ステップからあまり離れられなかったにちがいない。

男性結社による軍事的組織が、鉄器時代のイランにおいても、継続的に活動していたことについて、足立拓朗は「嘴型注口土器の数時代を経過しての存在から、その継続性を提唱」（足立 2007: 29）している¹¹⁾。

スラブ地域においてもまた、かつて人狼信仰があり、そこから青年結社のオオカミへの定期的な変身儀礼が行われていたが、この変身儀礼によってオオカミへと変貌した若者たちが「一種の制外者」（ならず者）として、対外的に集団で押し出して、略奪・暴行などを加えた¹²⁾。

11) 「嘴形注口土器はイラン鉄器時代を通して存在することから、その存続期間は原イラン多神教と一致する。また原イラン多神教で祭儀を執り行ったと推定されている男性結社の存在を指摘したが、嘴形注口土器を持った男性土偶がイラン鉄器時代に存在することは、男性結社の祭儀の存在を示唆しているのではないだろうか」（足立 2007: 19）。

12) 「[スラブ諸民族、さらにはバルト民族の人狼信仰の比較検討によって] 第一段階として10世紀頃までの人狼信仰は、おそらく呪術師的な長にひきいられた青年戦士結社の定期的な……狼への変身儀礼によって規定されていた。この戦士たちの変身儀礼は、実際の冬季の狼の被害をおそれ、狼を鎮めるための儀礼的齋戒を行っていたと思われる生産者層にとっては実際の狼の活動のイメージと重ねあわされるようになったであろう。この変身儀礼によって狼となった若者たちは、実際に一種の制外者として行動した。そして10世紀前後のキリスト教のスラブ諸国への普及を一つの契機として、このような変身行為そのものが異教的ないまわしいものとみなされるようになり、戦士結社の長の呪術師的側面のみが強調され、東および西スラブに伝えられる人狼信仰を生みだした。さらにおそらく同じ10世紀前後の封建制社会の確立とともにこのような戦士結社そのものが崩壊していった。……戦士結社の成員の定期的変身

4) インド・ヨーロッパ語族民に特有の軍人貴族階級の成立

ロバート・ニスベットの「西洋文明は、これまでのすべての文明の中で、断然、最も戦争志向（戦争遂行）的で、戦争支配的で、軍事的な文明である」（DUCHESNE 2009b: 13）を引用しつつ、ヨーロッパの世界制覇に関して、その好戦性を強烈に打ち出して、解明しているのが、リカード・デュシェヌ（Ricardo Duchesne）である。「世界のどの地域にも、軍人が貴族として君臨した文明はない。ただ、ヨーロッパ文明だけが、軍事的力を持つ貴族階級を擁してきた。その結果、ヨーロッパ文明は、史上、最も獰猛で、最も好戦的な文明である」が、ニーチェも言うようにヨーロッパ史における軸となる個人（vital individual）こそ、貴族（aristocrats）であり、ヨーロッパの真髄である（DUCHESNE 2009a: 15）。つまり、デュシェヌは、ヨーロッパ文明は、尚武の精神に富む軍人貴族によって築き上げられた非常に好戦的な文明であり、その特徴こそ、他のどこの文明にもないこの軍人貴族階級にあると主張している。

この好戦的な軍人貴族階級の起源こそ、黒海カスピ海北方ステップで、前4千年紀に生成した遊牧民たちである¹³⁾。もともと彼らは自分たちを「オオカミとなった自由な戦士たち」と自認しており、野獣のように闘うことを身上としていた。彼らこそ、古代から一貫してヨーロッパ文明の核となる軍事的勢力であった¹⁴⁾。彼らが強力な軍事的勢力でありえたのは、個人的自由・個人的野心に燃えた自由な戦士たちが、有能なカリスマ的リーダーのもとに自発的に参画して、自由意思で契約を結んだという効率的な組織編成によっていた¹⁵⁾。

というモチーフは、若者組によって冬季儀礼として行われる狼への仮装というモチーフに受け継がれたと考えられ、南スラヴにおける『狼の牧者』と東・西スラヴの人狼信仰には、呪術師的な人狼のイメージが残存した」（伊東 1981 : 791-792）。

13) 彼らは騎馬して、ダイナミックなイノベーション（牡牛に牽引された荷車、牛の飼育、犁）を基盤にして、肉・骨髄・乳製品などの栄養価の高い食糧を享受していたので、頑健な体格をしていた（DUCHESNE 2009a: 19）。

14) インド・ヨーロッパ語族民の貴族階級は、タキトゥスも彼らを「自らを狼と自認する自由な戦士たち」と形容したように、北欧の伝説の狂戦士、ベルセルク（あるいはバーサーク berserk）風の戦い方、すなわち、あたかも獣になったような状態で、怒りの形相で闘うというのが、彼らにとって理想であった。社会的な制約を免れて、個人単位で、栄光を求めて闘った。「野生の動物、熊とか狼に変身して（animalized transfiguration）」、「トランス状態（取り憑かれた）のような、獣のような叫び声で、戦士の個人性と単一性を極限にまで推し進めて闘う」という、前2千年紀のベルセルクは、2000年後の中世の騎士と同じ状態にあった（DUCHESNE 2009b: 24）。ギリシャの重武装兵・ローマの軍団は、ベルセルクの精神性を根絶やしにしたのではなく、むしろ、その行き過ぎ・混乱性、野蛮人的刺激をより効果的・組織的な戦闘スタイルへと変えて、「西欧人たちを史上最も残虐な戦士へと変えた」（DUCHESNE 2009b: 24）。ベルセルク風スタイルは、インド・ヨーロッパ語族の貴族的・個人主義的スタイルの一部でしかない。当時のインド・ヨーロッパ語族の社会は、極めて好戦的な貴族的エリートによって支配されていた。ベルセルクスタイルとギリシャの重武装兵とは文化的な連続性がある（DUCHESNE 2009b: 25）。尚武の精神に富んだ好戦性は、ステップにいた時から、中世を経て現代に至るまで、一貫して維持されたのである。

西洋の初源的な起源は歴史的ギリシャの合理的な精神にというよりは、むしろ、先史時代のインド・ヨーロッパ語族民の非合理的な英雄的精神に求められるべきであろう。西洋のルーツは、黒海北方ステップで初めて史上に現れ出た根本的に異なる貴族的（aristocratic）な性格にこそ見いだされるべきであろう（DUCHESNE 2009b: 50-51）。

3. イヌの《仲介者》化による社会的な三階級構造の生成

1) 原インド・ヨーロッパ語族におけるイヌの《仲介者》化による三階級構造の成立

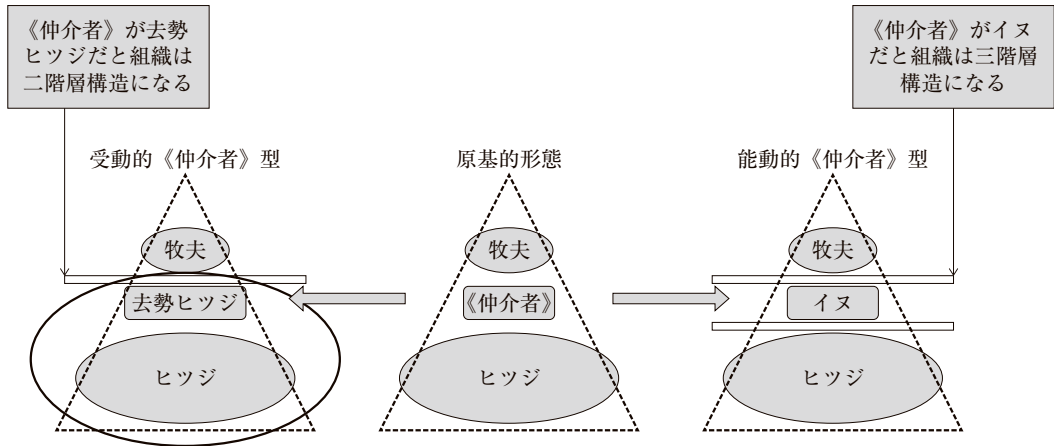
イヌは、もともとオオカミが手懐けられて、家畜化された。オオカミはヒツジの恐ろしい捕食者である。ヒツジの群れは、恐ろしいイヌに追い立てられて、群れとして動かされる。図1の右端の三角形で、能動的《仲介者》として示したように、この組織では、《仲介者》は家畜の群れとは明らかに異なるカテゴリーに属しており、《牧夫（ヒト）→仲介者（イヌ）→家畜群（ヒツジ）》という、三種の動物が三層構造をつくっている。もちろん、イヌが、今日のヨーロッパで見られるような非常に洗練された技能を有する牧羊犬となったのは、歴史的に中世以降のことである。しかし、前4千年紀末、原インド・ヨーロッパ語族が黒海・カスピ海北方ステップで大量のヒツジを飼養し始めた時、すでにイヌが牧夫の傍らにいたのはほぼ確実である。この場合は、恐らく群れをオオカミなどの害獣から守るための牧畜犬・警護犬としての役割を果たしていた。

2) 契約で保証された自由

それだけではない。《仲介者》として、去勢ヒツジと牧畜犬とを比較すると、自律性・独立性に際立った相違点がある。去勢ヒツジが、牧夫の完全な指示に従って、付和雷同的な行動を取るヒツ

15) 彼らインド・ヨーロッパ語族の軍人貴族階級は、戦闘部隊（War-bands）を組んでいた。その組織編成において、リーダーのもとに集まってきた戦士たちがそれぞれリーダーと忠誠の誓いによって結ばれた。戦士たちは、部族や血縁関係からは自由であり、彼ら自身の戦闘能力をもとに、力のある個人（リーダー）のもとに集まってきた人々であった。リーダーと戦士たちとの関係は個人的で、契約的である。契約は、意図的であり、忠誠の誓いによって、戦士はリーダーに拘束される。戦士たちは、従者として、リーダーに助太刀することを誓い、リーダーは、襲撃が成功した暁には彼らに成功報酬を与えることを約束する。かくて、「平等者の中の第1位の者」であるリーダーは指導者として承認されているが、同時に、戦士おのおのの主権も承認されている。これらの「同志のグループ」は、略奪行に遠征したり、または、狩猟・略奪という「狼のごとき wolf-like」生活を過ごしたり、祭祀でのリーダーの儀礼、超人的な栄誉を称える行事などに捧げられていた。戦士たちは、一般に、若くて、未婚、冒険に飢えていた。従者である戦士たちは、リーダーが戦闘で死んだ場合には自分たちも死ぬと誓っていたし、一方、リーダーも、いかなる状況下でも勇気と戦闘技術の個人的な手本を示すことが期待されていた（DUCHESNE 2009b: 33）。特筆すべきは、洗練された貴族的な価値も、ギリシャでの新しい民主主義的価値も、ともに「蛮族」の貴族的な（aristocratic）自由の中に起源を持っていることである（DUCHESNE 2009b: 48）。

図1 受動的《仲介者》と能動的《仲介者》——去勢ヒツジか、イヌか——



出所) 中川洋一郎「プラトン《魂の三分》説とデュメジル《三分イデオロギー》説—インド・ヨーロッパ語族民における歴史通貫的な統治原理—」『経済学論纂(中央大学)』第58巻第3・4合併号, 2018年, 331頁より。

表2 牧夫・イヌ《仲介者》という、条件付き従属(「契約」)関係—インド・ヨーロッパ語族民に特有の組織編成原理—

非捕食関係	牧夫は、イヌと捕食関係にはない。
相対的な上下関係	イヌは、《仲介者》として、牧夫からの命令を受ける下位の立場にある。しかし、生殺与奪の権をにぎられているわけではなく、不満があれば立ち去ることができるので、一定の自律性と自由は有している。
職能による採用	牧夫は、家畜群の警護・制御という、ヒトには不可能な職務をイヌができるという、いわば「職能」に目を付けて、イヌを《仲介者》に採用した。
「契約」関係	牧夫は、イヌに対して庇護・餌など、一定の便益を与える。その対価として、イヌは、牧夫の命令に従って家畜群の警護・制御という職務を果たす。しかし、気に入らなければ、イヌはこの関係を解消して、この組織から離脱できる。いわば、一種の「契約」関係にある。

出所) 中川洋一郎『新ヨーロッパ経済史 I —牧夫・イヌ・ヒツジ—』学文社, 2017年, 110頁より。

ジの群れを率いていくのに対して、イヌには一定程度の自律性があり、何よりも、一定程度の自由がある。なぜなら、牧夫の指示で群れを害獣から守るのは、牧夫からの庇護と餌の支給という対価があるからで、イヌは、牧夫からの対価に不満があるときは、いつでも逃げ去る自由を有しているからである。イヌを四六時中、鎖に繋いでおくことはできない。そのようなことをしたら、《仲介者》の仕事ができなくなる。

この初期遊牧組織において、牧夫は、いわば、主権を有する神であるかのように、ヒツジの運命を含めて、すべてを決定する全権を持っている。家畜であるヒツジは、いわば神の摂理に翻弄される被造物であるかのように、その生殺与奪の権を握る牧夫の完全な支配下にある。もちろん、家畜であるヒツジも、去勢ヒツジも、この組織に完璧に拘束されていて、ここから逃げ出すことはでき

ない。これに対して、イヌは、《仲介者》として、確かに牧夫から指示を受けるのでヒツジと同様に牧夫の支配下にあるように見えるが、しかし、この《仲介者》は、牧夫の庇護などの対価が気に入らなければ、立ち去るなどの一定程度の自由を有している。牧夫との関係は、対等ではないが、いわば「契約」関係であり、イヌは自分の意思で牧夫との関係を解消できる。《仲介者》としてのイヌは、牧夫から見れば、自己の支配下にある動物であるが、一方、ヒツジから見れば、イヌは自己の運命を握る神のごとき存在である。

《仲介者》としての去勢ヒツジは、初期遊牧組織において、家畜群のヒツジと同じカテゴリーに所属する。しかし、恐ろしい捕食者であるオオカミを祖先に持つイヌが、ヒツジと同じカテゴリーに入るはずはなく、全く別のカテゴリーに属する。イヌが《仲介者》になってこそ、三階層構造が成立する。

前4千年紀半ばに、原インド・ヨーロッパ語族によるステップの開発が進んだ。いくつかのイノベーションがその開発に寄与したが、中でも、ワゴン、騎乗とともに、イヌの《仲介者》化が契機となった。イヌの《仲介者》化は、組織の機能別三階層を生成させた。機能別三階層こそ、原インド・ヨーロッパ語族民が《三機能イデオロギー》を抱く現実的な基盤となり、《三機能イデオロギー》の生成をもたらした。従って、かかるイヌの《仲介者》化こそ、《三機能イデオロギー》の社会的・経済的、すなわち、現実的な基礎となった。

先ほど、デュシェヌヌを引用して、ヨーロッパ文明に固有の特性としての軍人貴族階級の存在を確認した。歴史を図式的に単純化すると、カリスマ的なリーダーのもとに、「自由な戦士団」を結成して、対外的に武力で押し出して、先発的に外部の地域を占領すると、後続の出身部族を呼び寄せて、支配者として君臨するという、彼ら軍人貴族階級の行動様式こそ、インド・ヨーロッパ語族の拡大の原動力であった¹⁶⁾。この好戦的な人々の起源こそ、ステップでの遊牧において、能動的《仲介者》となったイヌたちであった。

4. 受動的《仲介者》と能動的《仲介者》

セム系の遊牧民には、《仲介者》として去勢ヒツジ・ヤギを使用することが多い。《仲介者》が去勢ヒツジ・ヤギの場合、群れとなっている家畜であるヒツジとは同じカテゴリーに属している。

16) 「自由な戦士」こそ、ヨーロッパ文明に固有の特徴であり、その他の世界では見られない (DUCHESNE 2009a: 16)。インド・ヨーロッパ語族が持つ、武器を手にした「好戦的な貴族 aristocrates 文化」こそがヨーロッパ個人主義の起源であり、ヨーロッパ文明そのものの起源である (DUCHESNE 2009a: 16)。戦士たちは、二輪戦車 (Chariots) で力と富を目指して征服活動に勤しみ (DUCHESNE 2009b: 20)、「不滅の名誉」を求めて闘った (DUCHESNE 2009b: 21-22)。これは、16世紀以降、インディオスを征服したコンキスタドールたちによる征服活動そのものにもあてはまる。つまり、すでに原インド・ヨーロッパ語族民の時代に、彼らの本質が表れていたことになる。

従って、図1において、左端の三角形「受動的《仲介者》型」で示したように、この組織では、絶対の主権者である牧夫に対するのは、家畜群であるヒツジと《仲介者》である去勢ヒツジ・ヤギがくられてひとつになったカテゴリーである。この「受動的《仲介者》型」では、去勢ヒツジ・ヤギの場合、《仲介者》は家畜の群れの先頭に立って、群れを先導する形態になるので、あくまでも「同輩中の第一人者」でしかなく、この組織では動物のカテゴリーはヒト（牧夫）とヒツジ（家畜）の二つしかない。かくて、《仲介者》として去勢ヒツジ・ヤギを使用した遊牧社会がセム系のユダヤ・イスラム教社会へと発展した。ここでの基本的な社会的枠組みが、二階層構造である。

旧約聖書に成文化された宗教的信念とそれに依拠する社会構造は、遊牧という生業に大きく依拠している。繰り返し述べたように、遊牧には、《仲介者》が不可欠であるが、セム系遊牧は、去勢ヒツジ・ヤギなどの受動的《仲介者》を活用する。しかし、インド・ヨーロッパ語族民系の遊牧組織では、イヌという、能動的《仲介者》を活用することが多い。セム系との対比で、これがインド・ヨーロッパ語族民のアイデンティティーとなった。《仲介者》のあり方こそ、自由の源泉であり、自分たちの依って立つ基盤だと自覚したからである。

なぜ、前5千年頃に成立した遊牧がその後の人類の命運を決めたのか。それは、三層構造からなる社会構造をつくり、機能本位原理¹⁷⁾を案出したからであるが、その鍵は《仲介者》の存在、中でも、イヌを《牧畜犬》化したことであった。この《仲介者》の差異こそが、能動的《仲介者》を生成させ、遊牧三階級構造において、ユダヤ・イスラム教型とキリスト教型とを峻別したと考える。

Ⅲ. ヨーロッパ・キリスト教世界における《仲介者》

1. 新約聖書における牧夫としてのイエス

新約聖書において、イエスは、牧人（牧夫）という表象で描かれている。セム系一神教の世界では、ユダヤ人イエスは、牧夫として描かれている。新約聖書において、牧夫（ποιμήν [poimen]）および飼養（ποιμαίνω [poimaino]）という言葉は29回出てくるが、うち24回は、イエスを描写す

17) 機能本位原理とは、機能を基準に、組織を編成する原理を指している。すなわち、まず仕事を先行して決め、その仕事を遂行するのに必要な職務を限定したうえで、その職務を果たすのに最適の人材を広く世間から募って採用して、組織を編成する原理である。この原理は今も当たり前になっているが、しかし、ヒトは出現してから400万年間、機能本位原理とは全く無縁の分業形成方式を基準としてきた。なぜなら、何よりもバンド組織では、あらかじめ成員たるバンドメンバー（ほぼ親族）が決まっていたからである。遊牧が開始され、《仲介者》が不可欠の存在になった時に、原インド・ヨーロッパ語族民がヒツジという群居性草食動物の大量飼育を実施するに際して、イヌという外部の「人材」（この場合は、もちろん、非ヒトのイヌだが）に目を付けて、ヒトにはないその有能な機能を活用するために、牧畜犬として採用した。これが、機能本位原理の生成の端緒である。詳しくは、拙著（中川 2017d：64-168）を参照していただくと幸いです。

る際に用いられている。例えば、イエスは、「ヨハネ 10：11」において、自身を「よき羊飼い」“Good Shepherd”と呼んでいる。英訳聖書で Shepherd が使用された29回のうち、イエスではない場合は5回だけであり、その場合、教会のメンバーを指していた¹⁸⁾。

ヒツジは柔和、忍耐および従順の象徴であり、恵み深い救い主は、人間の持つこれらの性格を象徴するものとしてよく使っている（イザヤ書53：7、使徒言行録8：32、など）。〈頭なる羊飼い〉であるキリストと、その信徒との関係は、東方における羊飼いとそのヒツジの群れに見事に表われている関係に、美しくも譬えられている（スミス 2002：386）。

それらの描写から、イエスは、大規模なヒツジの群れを優しく世話して、大人しいヒツジたちを守り、育て、良き道へと導くという役割を果たしている。牧夫として描写される時、イエスは、信徒たちに優しいまなごしを注ぎ、愛を以て人々を慈しむ慈愛の精神に満ちあふれている。現実の遊牧民において、去勢ヒツジ・ヤギを《仲介者》とするセム型の遊牧を背景としている¹⁹⁾。聖書における牧夫・ヒツジの関係は、去勢ヒツジが《仲介者》である西アジア社会の二階層構造を十全に物語っている²⁰⁾。

2. 一神教における《仲介者》の重要性

絶対神・超越神と、常人である信徒は直接交信できないのだから、絶対神を信仰する一神教では、神と人との間をつなぐ媒介となる者が必要である。その神と人との媒介となる者こそが《仲介者》である。啓示や救いの問題に関して超越的世界と人間の世界とを仲介する存在、あるいは、神

18) <https://en.wikipedia.org/wiki/Pastor> (September 10, 2019)

19) 前稿（中川 2018a）において、プラトンの国家論を検討した際に、ギリシャの哲学者エンペドクレスとの有名な論争を取り上げた。両者はヒツジの群れを飼養する牧夫を念頭に置いていた。プラトンの議論では、温情的な国家が賞揚されていた。それに対して、エンペドクレスは、牧夫は結局はヒツジを屠殺するのだから、「日常的な世話を慈愛の精神の表われとするなど偽善的である」と主張していた。本稿での議論を踏まえると、プラトンは、議論の前提に受動的《仲介者》を考え、エンペドクレスは、能動的《仲介者》を念頭に置いていたことになる。

20) 牧畜に関して、広範な問題意識と丹念な実態調査をもとに文化人類学において貴重な貢献を果たした谷泰は、その主要なフィールドワークがイタリアなど南ヨーロッパであったことから、《仲介者》としてのイヌについては、積極的な意義を認めず、むしろ、去勢ヒツジの応用だと述べている。「またいわゆる牧羊犬として知られている、訓練を受けた犬の利用も考えられるが、これは基本的技法と云うよりも、ヨーロッパを中心としたひとつのエラボレーションというべきであろう」（谷 1992：59）。逆に、本稿での筆者の主張は、従来からの《仲介者》論において、去勢ヒツジに限定されてきた問題関心を牧羊犬・牧羊犬などのイヌにまで広げて、《仲介者》たるイヌの意義・画期性（組織編成原理史上の分水嶺を引き起こした）を浮き彫りしようとするものと言える。

と人との間に入って、何らかの仲介者的役割を果たす者と言えよう。

かくて、超越神が支配する一神教世界では、そもそも《仲介者》が不可欠なのであるから、《仲介者》的役割を果たした者は、数多くいた。

宗教史を見ると、啓示や救いの問題に関して超越的世界と人間の世界とを仲介する存在として多くの実例があったことが分かる……。まじない師、祭司、グールー、預言者、神王 (sacred kings)、権現、大宗教の教祖など。従って、絶対神・超越神を認める宗教には、なんらかの《仲介者》が複数存在することは、少しもおかしくない。ユダヤ教にも、《仲介者》は多数いた。旧約聖書の宗教においては、預言者、祭司、士師、王などはすべて、律法や犠牲の儀式などと同じく、イスラエルの聖なる神と罪に迷う選ばれた民との間を仲介するものである。これらの仲保者〔《仲介者》と同意。以下、同様〕は神の意志を民に知らせ、神の裁きと神の憐れみとを宣告し、民に向かっては神を代表し、神に向かっては民を代表する (リチャードソン&ボウデン編 1995:436)。

つまり、ユダヤ教には、超越神と人との仲立ちをする者は数多くいたのであるが、しかし、キリスト教徒にとって、「イエス・キリストこそ真の仲介者である」。キリスト教界における標準的な解釈では、《仲介者》はイエス・キリストであり、その他にいない。旧約聖書で《仲介者》(ギリシャ語で、メシテース)は、神と人との仲介者的役割を果たす者、また、新約聖書でも神と人との間で取りなしをする者とされるが、「とは言え、冒頭に聖句 [I テモテ 2・5] を挙げたごとく、仲介者のゴールはイエス・キリストにある。旧・新約のいかなる偉大な人物をもってきても、あるいは私たちの仲介の務めがいかに重大であるかを述べてみても、イエス・キリストこそ真の仲介者であるという一事の前には、一切が光を失ってしまう。……唯一のまことの霊なる神との間に、主イエス・キリスト以外の仲介者を設けることははなはだしい罪である」(宇田 1991:900)。「こうした仲保者としての役割のすべてがイエス・キリストにより引き継がれ、しかも最終的・永久的にまっとうされるとの教えが新約聖書の宗教の要をなす原理である。……[プロテスタントもカトリックも] 基本的には、キリストが我々に救いをもたらすことのできた唯一無二の仲保者であるとする点で食い違いはない」(リチャードソン&ボウデン編 1995:436)。

すなわち、超越神を認める宗教では、《仲介者》は珍しい存在ではなく、複数、あるいは、多数存在しうる。従って、新約聖書に描かれた迷える子羊たちを領導する牧夫としてのイエスは、セム系一神教の世界では全く問題なく受け止められるだろう。通常の預言者のように映り、そのように行動しているからである。

しかし、キリスト教界では、《仲介者》とはイエス・キリストのことだけを指しているのである。

3. イエス・キリストという、真の《仲介者》

《仲介者》の意味することがユダヤ教とキリスト教とで異なっているとはいえ、《仲介者》論は、キリスト教界では、むしろ、お馴染みの枠組みであり、ヨーロッパ人の世界観に適合的な論理立てであろう。キリスト教徒が、《仲介者》という言葉に込められた含意が肝心だと思うが、では、いかなる含意が込められているのであろう。

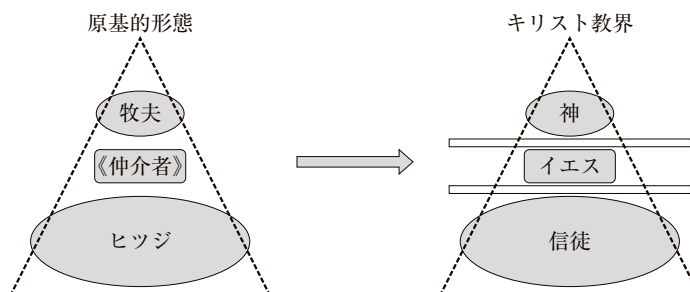
《仲介者》が果たす役割は、超越神と人との間の仲立ちであるが、しかし、キリスト教では、それにとどまらず、「[トマス・アクィナスによると、]キリストは人間であることによるのみ神と異なる存在であり得るのであり、また完全なる人間としてのみ罪ある人間と異なる存在であり得るが、仲保者としての務めを果たすためには『二つの極の双方から離れて立つ者であることが必要である』からである」（リチャードソン&ボウデン編 1995：436）。

すなわち、イエス・キリストは、「二つの極」、つまり、神からも、ヒトからも、ともに離れて立っている。神のように見えるが、神でもなく、ヒトの形を取っているが、ヒトでもないのだからこそ、《仲介者》となっていると、キリスト教界は考える。《神→仲介者→ヒト》という、三階層構造において、最上位とも、最下位とも、双方の極から離れて立つ存在、そういう役割を果たせる者、それが、キリスト教における《仲介者》である。そうであるからこそ、キリスト教では、基本的に、そもそもイエス・キリストだけが真の《仲介者》として設定されている。

一神教の神は人智を超えているから、そのままでは人は神と交信できない。神と人をつなぐ《仲介者》が一神教では不可欠になる。その場合、《仲介者》は、必ずしもイエス・キリストだけではなく、何人いてもいいし、しかも、人間であるというのが、ユダヤ・イスラム教の教義である。

これこそがまさしく典型的なユダヤ教的態度なのである。他方、人間のかたちをとった神を信じるキリスト教のほうは、少なくともこの世の諸物に関するかぎり人間中心主義的である、あるいはその傾向をもつ。ユダヤ教徒にとっては、イスラム教徒にとってと同様に、神が人に

図2 真の《仲介者》としてのイエス



出所) 中川洋一郎『新ヨーロッパ経済史 I—牧夫・イヌ・ヒツジ—』学文社、2017年、119頁より。

なると想定することは冒瀆的なのである。なぜなら他宗教の多くの場合に、神は人になる如く、牛にもなれば、猿にもなるようにみえたからである。自然に対するキリスト教独自の態度は、大部分その人間中心主義から出てくる。たとえばカルヴァンの場合、神は「いっさいのものを人間のために造った」（『キリスト教綱要』第一編第14章22）ことを堅く信じて疑わない。カルヴァンの議論によれば、もし神が一日を選べば、その一日で世界の創造は完了したのである（パスモア 1998：18）。

「人間のかたちをとった神を信じるキリスト教のほうは……人間中心主義的である」というパスモアの考えはその通りであろう。教義の中で、ますますイエス・キリストへの志向を強めようというのだから、人間中心主義を強化しようという発想であり、やはりキリスト教（西方のキリスト教）はリン・ホワイトが言ったように、「きわめて人間中心主義的」（リン・ホワイト 1972：87）である。そもそもイエスを《仲介者》として規定した時、キリスト教は人間中心主義化への道を歩み始めた。

さらにここで、パスモアが、「ユダヤ教徒にとっては、イスラム教徒にとってと同様に、神が人になると想定することは冒瀆的」だと述べていることが重要である。ユダヤ・イスラム教徒にとって容認しがたいのが、イエスは「神の子」という設定、すなわち、「神でもあり、人でもある」という属性であろう。逆に、キリスト教徒にとって、「イエスが神であり、人でもある」という属性はどうしても守らなければならなかった。キリスト教徒にとって、この属性は、絶対に守らなければならない信仰の核である。キリスト教徒にとって、イエスがただの人間であってはいけないのである²¹⁾。ここにこそ、三位一体論の、キリスト教徒にとっての必然性がある。

21) 塩尻和子が、キリスト教三位一体論へのイスラム教からの主張・批判を次のように簡潔にまとめている。「イスラームはユダヤ・キリスト教の伝統に基づいており、ユダヤ教徒とキリスト教徒の双方を『啓典の民』として認めている。これらの二宗教にたいするイスラームの独自性は、イスラームがそれらについて容認するか拒否するかという姿勢に表れているが、イスラームとキリスト教との間の、もっとも基本的な区別は『イエス』の扱いかたである。イスラームの教義では神は全知全能であり、完全な、絶対な、無限の、慈愛深い、超越した、などと表現されるが、もっとも重要な表現は『唯一の』である。神の唯一性の主張はイスラームの中心的な教義であり、原則として救世主、仲保者、聖人などは存在しないと考えられている。イエスを救世主として『神の子』とするキリスト教の三位一体説は、キリスト教においてはもっとも重要な原理であるが、イスラームではこの教義は、神の唯一性に照らして受け入れることはできない。この点がイスラームとキリスト教をわける最大の争点であるということができよう。この違いに基づいてイスラームは、一般にはキリスト教の三位一体説を『多神崇拜』、あるいは『偶像崇拜』につながるとして非難してきた」（塩尻 2004：354-355）。一神教としての教義としては、ユダヤ・イスラム教の主張の方が、純粹で、正統的である。キリスト教の三位一体論は、一神教の純粹性を失っている。しかし、能動的《仲介者》はインド・ヨーロッパ語族民の「国体」であるので、イエスが能動的《仲介者》であることは、キリスト教徒としては絶対に譲れない原則である。ここにキリスト教界が三位一体を理論として核に据えた理由がある。

なぜ、ユダヤ教から分かれて誕生したキリスト教は、イエス・キリストに、かかる特異な属性を付与したのであろうか。なぜ、ヨーロッパ人は、1千年紀前半に、《異教》からキリスト教へと転向した際に、かかる特異な《仲介者》の属性を受け入れて、今日まで1500年間以上、その信条を維持してきたのであろうか。

原インド・ヨーロッパ語族民は、前4千年紀以降、ステップから出発して四方に分散し始め、西方に進んだ部族がやがてゲルマン人、ケルト人、ローマ人など、現在のヨーロッパ諸国民の祖先の一部となった。彼らは、やがて1千年紀前半からキリスト教を受け入れ始めるが、ヨーロッパ人によるキリスト教受容の特徴のひとつが、「《仲介者》たるイエス・キリスト」という観念の受容であった。それは、先に見た「[イエス・キリストが体現する《仲介者》は]二つの極の双方から離れて立つ者である」（リチャードソン&ボウデン編 1995：436）という規定に当てはまる。インド・ヨーロッパ語族民は、すでに遊牧を開始してから、イヌという「半神半獣」的な《仲介者》を抱えていたために、「半神半人」的な存在としてのイエス・キリストという観念は、むしろ、彼らにとって理に適っていた。そして、本稿の能動的《仲介者》こそ、「半神半人」の起源であった。

かくて、《仲介者》としてのイヌは、まさにフィンクが言う、「半神半獣」のケンタウロスの性格を持っている（フィンク 1983：59）。この「半神半獣」的な《仲介者》こそが、「ヨーロッパ的世界秩序構築のための原型的パターン」となった²²⁾。ヨーロッパ思想において、折に触れて、このタイプの《仲介者》的な発想が前面に出てくるのであり、社会的にも重要な役割を果たしている。ヨーロッパ人は、組織の中に《仲介者》がいないと落ち着かないと感じ、《仲介者》を「ヨーロッパ的世界秩序構築のための原型的パターン」と認識しているのは、まさに《仲介者》こそが、しかも、イヌを能動的《仲介者》としたことが、彼らの遠い祖先、原インド・ヨーロッパ語族民が、前4千年紀に、黒海・カスピ海北方ステップで自己の部族的アイデンティティーを確立する契機となったからである（以上、この節の叙述は、中川 2017d：117-122に負うところが大きい）。

22) 例えば、オイゲン・フィンクも強調するように、人間の真の「場所」は動物と神の中間に存在するが、それゆえ、人間は神と動物との中間に存在するというその位置づけから由来する緊張だけでなく、われわれ自身の中にある神的な要素と動物的な要素との間の闘争という緊張も強いられている。その結果、人間は、形而上学的に絶えず引き裂かれた不安な存在に陥っており、相矛盾する二重存在であるケンタウロス（半獣半神的存在）のような姿を呈している（フィンク 1983：58-59）。山川偉也によると、これこそが、まさに「ヨーロッパ的世界秩序構築のための原型的パターン」（山川 1984：161）となっている。ここで語られているケンタウロス（半獣半神的存在）こそ、後のヨーロッパ史において重要な役割を果たすことになる《仲介者》の起源的形態と言うべきであろう。ケンタウロスについては、松村一男が、ジョルジュ・デュメジルの『ケンタウロスの問題』に触れつつ、「ケンタウロスとガンダルヴァという神話的表象の類に注目」せざるをえないので、「デュメジルに倣って、……ギリシャとインドの比較という視点から考えるべき」（松村 2010：447）と述べている。本文で述べたように、筆者は、《仲介者》というイヌが果たした機能こそ、彼ら原インド・ヨーロッパ語族民の「国体」を決めたと考え、いづれにしろ、広い視角から《仲介者》を意義づけることが有益ではないかと考える。

おわりに——セム系一神教からの決別——

1. 三位一体論は、理論というよりは、むしろ信仰・信念の産物

三位一体論とは、「父なる神」「子なる神 [イエス・キリスト]」「聖霊の神」という三つのペルソナ [位格] がひとつの神格として一体をなすという教説である (小口・堀 1973:147)。しかし、「神は一つだが、三つである。同時に、三つだが、一つである」という、このような神学的表現は、人智を超えている。「神は一つだが、三つである」ことを、数式で表した「 $x=3x$ という方程式は、数学的には成立するはずがない」のであり、もし成立するのなら、それは、 $x=0$ の時だけである。しかし、 $x=0$ ならば、結局、神は存在しないことになってしまう。神の神学的表現である三位一体論は、神が存在しない時だけ正しいというのだから、これを、「三位一体説のパラドックス」と言う。にもかかわらず、三位一体論は、理屈で理解するものではないので、それを了解するかどうかは、あくまでも信仰の領域だとされて、このパラドックスは回避されたのである²³⁾。

アウグスティヌスが完成させた三位一体論でも、まず三位一体論を信じる信仰心があり、そのうえで教義が整えられた²⁴⁾。つまり、三位一体論とは、まず何よりも信念であり、信仰の問題である。では、いかなる信念であったのか。その信念とは、もちろん、イエスは神であり、人であるという、教義上の信念である。イスラム教とキリスト教との間にある最も基本的な差異は、まさにイ

23) 「ニケーアの公会議で問題とされたのは、父なる神に対するイエスの人性、神性をめぐる議論であった。これは、子なる神としてのイエスの神性を認めることでいちおう着落したが、聖霊をどう考えるかという新しい問題が加わってまたまた困難な事態が起こってきた。神から遣わされて自らも神であるキリストが地上を去った後、罪や死や律法から人類を救い、信者に信仰と心の平和を与えるのは、聖霊という形で信者の心に宿るキリストであると考えられた。だからはじめからパウロなどは、聖霊はキリストと有機的に結ばれていると考えていたのである。それでは聖霊も神性を待つといえるのだろうか。そういえるとすれば、キリスト教は論理的には多神教になってしまう。マケドニア学派の神学者たちが、キリストの神性は認めながら聖霊の神性を否定したのは、一神教であることを守ろうとする精一杯の論理的抵抗であったと考えることができる。この紛糾を最終的に解決したのが、テオドシウス帝 (在位379~395) によって381年に召集された第一コンスタンティノーブル公会議であった。この会議によって、聖霊の神性は認められ、神は自らを同時に、父と子と聖霊なる三つの位格 (ペルソナ) の中に示す一つの神と宣言された。すなわち、父と子と聖霊は各々完全に神である。が、三つの神があるのではなく、存在するのは一つの実体 (スプスタンティア)、一つの神であることが決定されたのである。 $x=3x$ という方程式は、数学的には成立するはずがない。けれども、 x の性格が神秘性であり、信仰によって理解されるために、信者の心には素直に受け入れられ、豊かな恵みを約束するものとして定着したのである。これが三位一体論のパラドックスである」(半田・今野 1977:199-200)。

24) アウグスティヌス『告白』13巻における三位一体論について、神が三位一体であることを論証しようとしたのではなく、「むしろ逆です。神が三位一体であるという信仰が先に在り、その信仰にもとづいて、神の三位一体とのアナロギイによって、精神の三一的構造を探索」(山田晶 1986:198) するのが目的であった。

イエスのものの意義づけである。キリスト教の最も重要な原理である三位一体論では、イエスは、「神の子」として、救世主とされる。さらに、メシアの受肉説も導かれている。ユダヤ教・イスラム教では、神の唯一性から、この三位一体論は受け入れられないのは、当然であろう。

2. 聖書によるユダヤ人としてのイエス

初期キリスト教徒（古カトリック教会）が直面していた教義上の困難は、まず、この「イエスの人性・神性」という難問であった。「イエスの神性」、これなくしては、キリスト教自体が成立しない。彼らキリスト教徒にとって、イエスの神性を守ることは大前提であった。しかし、厄介な問題があった。聖書には、ユダヤ人イエスが前面に出ていて、むしろ、イエスのユダヤ人性が強く描かれているのである。聖書に忠実であろうとすると、イエスの人性が強く前面に出てしまい、神性が足りなくなってしまう。ユダヤ人神学者レオ・ベックは、次のように語る。

イエスは真にユダヤ的な人物であって、イエスの努力と行為、感情と感覚、語りと沈黙は、ユダヤ的な刻印を、ユダヤの理想の特徴を、ユダヤ教の中にあり、当時はユダヤ教の中にしかなかったものの最上の特徴を担っている。イエスはユダヤ人の中のユダヤ人であった。他の民族から、イエスのような人間は現れなかったであろうし、他の民族において、イエスのように活動する人間もいなかったであろう。そして、他の民族において自分を信じる使徒をイエスは見出すことはなかったであろう（ベック 2011：253）。

新約聖書においては、人間としてのイエスという「人性」の側面が強く出ている。とりわけイエスは「ユダヤ人の中のユダヤ人」として描かれているから、これも道理である。新約聖書におけるイエスは、紛うことなきユダヤ人だというベックの主張が正しければ（筆者は正しいと思うが）、そこで牧夫として描かれたイエスは、去勢ヒツジ・ヤギを駆使する、すなわち、受動的《仲介者》を指図するセム系遊牧民の牧夫である。

原始キリスト教がユダヤ人の枠から外に出て、異邦人も信仰する初期キリスト教となった時、キリスト教徒にとって極めて深刻な課題は、聖書に依拠する限り、イエスの人性が強すぎたので、イエスの神性に疑念が生じかねないことであった。新約聖書におけるイエス・キリストは、牧夫（牧人）として、つまり、ヒツジの群れを優しく飼養する牧人として描かれているので、聖書中のイエス像を転換する必要があった²⁵⁾。

25) かかるセム系的牧夫は、この場面では、ヒツジたちを気遣って優しく世話する牧夫として描かれているが、最終的に、牧夫は家畜群を屠殺する。群居性草食動物は愛玩動物ではない。あくまでも殺されるために生かされているのが、ヒツジなど群居性草食動物の宿命である。かかる牧夫による家畜群の絶対的支配こそ、家産制の起源である。ミッシェル・フーコーが牧人権力・牧人国家として近代以降の国家

3. 真の《仲介者》という概念

しかし、同時に、この時、疑念は、単なる宗教的教義の領域にとどまらずに、潜在的に、社会体制上の信念（本稿では組織編成原理上の信念と呼んでいるが）に関しても生じていた。それは、イエスが真の《仲介者》であり、真の《仲介者》こそ、自分たち西方キリスト教徒のアイデンティティーそのものだという信念である。非ユダヤ人原始キリスト教徒にとって、イエスが「受動的《仲介者》を指図するセム系遊牧民の牧夫」であることには、満足できなかったことになる。

イエスがセム系の遊牧組織での牧夫のままであると、彼は単なる予言者の一人にすぎないので、彼の神性は否定されてしまう。去勢ヒツジ・ヤギのように、付和雷同性の高い群れを先頭で率いていく、いわば受動的《仲介者》を担うことになってしまう。

能動的《仲介者》であってこそ、彼には神としての神性が宿るのである。従って、三位一体論とは、聖書中の受動的《仲介者》を、能動的《仲介者》へと転換させるための理論であった。ペルソナとしては牧夫であるが、その内実は能動的《仲介者》でもあり、神そのものだとする三位一体論では、イエスの神性を維持しつつ、《仲介者》として処遇できるからである。

ヨーロッパ・キリスト教徒は、能動的《仲介者》の役割において自由の何たるかを認識した。だとすると、イエスを能動的《仲介者》へと転換させることで、一神教の教義の中に、自由の観念を滑り込ませることに成功したことになる。原始キリスト教徒の時代から遙か1500年以上経過した現代の神学理論の領域であるが、ドイツの神学者ユルゲン・モルトマン（1926-）は、唯一神論は独裁神論であり、三位一体論（三一論）こそ、自由をもたらす神論だと述べている。

三一論は、哲学的、道德的、政治的唯神論に対するキリスト教的な二者択一（Alternativ）であります。唯一神論は、地上における支配と隷属を基礎づけます。それに対して三一論は、階級も特権もない共同体を基礎づけるのであります。三一論は、自由に関する神学的教説の基礎づけであります。唯一神論は、独裁神論（Monarchismus）であり、どのような形のものであれ「絶対依存の感情」を基礎づけるものであります。しかし、主の霊のあるところには自由があります。

そもそも、唯一神論とは何でありましょうか。

唯一神論は独裁神論であります。すなわち、宇宙は、ひとりの神—一つのロゴス—ひとつの世界という独裁的な構造を持っています（モルトマン 1981：73-74）。

モルトマンは、三位一体論こそ、ユダヤ教・イスラム教の独裁神とは違って、人間に自由を保障

形態の変容を説いているが、この「優しき牧夫」こそ、ある意味で、専制国家への道を開いた人々である（中川 2017a；2019c）。

していると主張している。能動的《仲介者》こそ、彼らが考える「自由」の根拠・源泉である。これは、能動的《仲介者》こそ、自分たちのアイデンティティーだと考えたことの帰結であろう²⁶⁾。

4. 聖書のセム系世界からの決別

経典宗教と呼ばれるユダヤ教・キリスト教・イスラム教は、その根源に共通の宗教的信念があり、アブラハムの宗教とも呼ばれているように、その信念は宗祖のアブラハムと不可分に結びついている。これらの一神教は、アブラハムがユダヤ民族の民祖とも言われるように、セム系の世界で成立した宗教であり、先に見たように、新約聖書におけるイエスも、紀元1世紀に成立した共観福音書という初期の部分では、「ユダヤ人の中のユダヤ人」として描かれている。

その一方で、遠く北方のステップで前4千年紀に成立した原インド・ヨーロッパ語族民は、前2500年頃までにはステップを出て、各地へ拡散していった。彼らは、遊牧という生業を営む過程で、イヌの能力に目を付けて、積極的に活用した。ヒツジの遊牧においてイヌが果たした機能は、いわば暴力による群衆（ここでは、ヒツジ）の管理である。しかし、組織編成原理という視角から見ると、牧夫と家畜群の間に入って、三階層構造の一翼を担って、牧夫による統括機能と家畜群による生産機能を媒介するという、能動的《仲介者》の役割であった。この組織でイヌが持っていた「個人主義的な自由」という属性は、インド・ヨーロッパ語族民にとって対外的に重要なアイデンティティーの拠り所であり、「自由なる戦士」として、彼らの軍人貴族階級の生成と維持の根拠となった。

インド・ヨーロッパ語族民は、前2500年頃までにギリシャのペロポネソス半島に侵入し、島嶼地域のみケーネで文明の基盤を築いている。ギリシャは、メソポタミア・エジプト由来の先進文明を擁する地域であり、地元の文明をインド・ヨーロッパ語族民が単純に征服して、全面的に印欧化してきたわけではなかったが、古代ギリシャ文明が形成されるに当たっては、政治・思想など肝心の場面で、インド・ヨーロッパ語族民の刻印を押すことができた。

初期キリスト教がユダヤ人の世界を出て、異邦人の間に拡散し始めた時、セム系世界に特徴的な、聖書に盛られた二階層構造（受動的《仲介者》に象徴される）と、一方では、「自由な戦士」という、インド・ヨーロッパ語族民が標榜する個人的自由・個人的野心によって裏付けられる三階層

26) 例えば、中野正勝は、なぜ、三位一体論をキリスト教徒が受け入れたのかについて、湿潤・温暖な地域に住む日本人からの見解として、示唆的な文章を公表している。三位一体論において、神と信者との関係は、あたかも「親子の間柄」に準えることができる。恐ろしい唯一神から逃れるため、イエスという救い主に「愛」や、共感とか救いを求めたからだと言う（中野 2013）。キリスト教が、ユダヤ人の世界の外へ出て変質したこと的一端を表しているようで興味深い。なお、ヴェンデル（1988）が、三位一体論は男性原理の発揚であるとして激しく批判している。三位一体論は、もともと男性的性格が強い牧畜から来ているので、それも道理であろう。

構造（能動的《仲介者》に象徴される）という、組織編成原理上の対立が生じた。その対立による軋轢を緩和し、可能ならば解消するための理論が、三位一体論ではなかったかと考える。それは同時に、キリスト教徒によるセム系世界からの決別の試みを意味したのである²⁷⁾。

イスラム教は、一神教として純粹であるとも言える。イスラムの神は、唯一神そのものである。絶対神と呼ぶに相応しい。イスラム教の聖典『コーラン』こそ神の言葉であり、イスラム教徒はそこに表出された啓示を忠実に実践しなければならない。飯山陽の啓蒙的な書物を読むと、この点でイスラム教の神は非妥協的であり、冷酷・無慈悲である。イスラム教徒に「イスラムの神を信じない者は殲滅すべき」と命じているのである。従って、近代以降の西洋的価値観（個人の自由・民主主義・他者の尊重など）とイスラム教の価値観とは真っ向から対立している（飯山 2018；2019）。

もちろん、キリスト教の布教を大義として、過去500年間にヨーロッパ人がアメリカ大陸、アジア、アフリカで行ってきた非道な一連の所業を見れば、個人的自由など、先に見た西洋的価値は偽善的だという見方もできる。しかし、二者のうちいずれかを選択せざるをえないのなら、個人の自由・民主主義・他者の尊重を（少なくとも建前としては）謳っている西洋的価値のもとで暮らしたいと誰もが考えるであろう。筆者はキリスト教徒ではないので三位一体論を信じているわけではないが、同じ一神教でありながら、イスラム教が標榜する絶対的一神教から、ヨーロッパを分かちものが、われわれには理解不可能で奇妙に映る三位一体論であり、その基盤にイヌという、積極的《仲介者》の存在があったことを確認しておきたい。ヨーロッパにおける個人的自由の源泉を、そこに求められるからである。

27) 新約聖書で描かれている世界（それを、本稿ではセム系世界と呼んでいる）とジョルジュ・デュメジールが提唱するインド・ヨーロッパ語族民に固有の《三機能イデオロギー》が描く世界とは、異質な性格を持っている。よく言われるように、「ヨーロッパ文明は、ヘブライ的伝統とゲルマン的伝統の融合」であることの、別の表現でもある。本文で述べたように、三位一体論とは、異なる世界からやってきた両者を調和させる試みであったと思う。そうであるならば、（もし、キリスト教信者であれば）当然、三位一体論と《三機能イデオロギー》とを比較して、三位一体論を《三機能イデオロギー》によって補強しようという企てがなされてもおかしくない。筆者が知り得た限りでは、ポーターとホブスの「三位一体とインド・ヨーロッパの三区別世界観」は、そのテーマで発表された希有な論文である（PORTER & HOBBS 1999）。しかし、三位一体論を新約聖書の記述の中に見出そうとしたうえで、《三機能イデオロギー》に基礎を置く機能三分割とその世界観を三位一体論と整合的に調和させようという彼らの議論は、失敗しているように思われる。《三機能イデオロギー》の世界観では、主権・暴力・生産という諸機能は三つに分かれたうえで、不可逆的で、明確に区別された、非互換的な、上下の階級性が本質的な性格になっているからである。かかる非互換的な上下の階級性と、三位一体論によって主張されている三一神（三つは一つで、一つは三つ）とは、明らかに矛盾していて、両者は両立不可能だと思う。セム系世界原則は、三位一体論によって緩和されたとは言え、そもそも、違う二つの世界からやってきた原理原則がぶつかっているから、両者の調和は不可能ではないかと考える。

参考文献

- 足立拓朗 (2007) 「原イラン多神教と甕形注口土器 (特集 西アジアの宗教)」『西アジア考古学』 8: 11-33.
- 飯山陽 (2018) 『イスラム教の論理』新潮社, 238.
- (2019) 『イスラム2.0—SNSが変えた1400年の宗教観—』河出書房新社, 267.
- 伊東一郎 (1981) 「スラヴ人における人狼信仰」『国立民族学博物館研究報告』 6 (4): 767-796.
- 井本英一 (1969) 「古代イランの犬」『オリエント』 12 (3-4): 1-22.
- ヴィカンデル, ステイグ (1997) 『アリアの男性結社』(前田耕作編・監修, 檜枝陽一郎・中村忠男・与那覇豊訳) 言叢社, 263.
- ヴェンデル, E. M. (1988) 『乳と蜜の流れる国』(大島かおり訳) 新教出版社, 294.
- 宇田進 [ほか] 編 (1991) 『新キリスト教辞典』いのちのこば社, 1259, 20.
- 大塚秀見 (1997) 「『仲介者』概念をめぐる (智豊合同教学大会紀要)」『智山学報』 46: 237-245.
- 大森理絵・長谷川寿一 (2009) 「人と生きるイヌ—イヌの起源から現代人に与える恩恵まで」*The Japanese Journal of Animal Psychology*, 59 (1): 3-14.
- 大多和明彦 (2000) 「東西文化とゾロアスター教」『東京家政大学研究紀要』 40 (1): 1-7.
- (2002) 「ゾロアスター誕生神話の秘密: 三位一体論の原型」『東京家政大学研究紀要』 42 (1): 11-21.
- (2003) 「ゾロアスター教の三位一体論」『東京家政大学研究紀要』 43 (1): 13-18.
- 加茂儀一 (1973) 『家畜文化史』法政大学出版局, 1058, 84.
- 栗原成郎 (1991) 『スラヴ吸血鬼伝説考』河出書房新社, 282.
- 小口偉一・堀一郎監修 (1973) 『宗教学辞典』東京大学出版会, 813.
- ゴンサレス, フスト (2010) 『キリスト教神学基本用語集』(鈴木浩訳) 教文館, 320.
- 塩尻和子 (2004) 「アブドゥル・ジャッパールのキリスト教理解: イスラーム神学における宗教間対話」『宗教学研究』 78 (2): 565-589.
- 須永梅尾 (1976) 「マニの啓示にあらわれた“仲介者”の観念」『オリエント』 19 (2): 69-84.
- 鈴木秀夫 (2004) 『超越者と風土』原書房, 168.
- スミス, ウィリアム (2002) 『聖書動物大事典』(小森厚, 藤本時男編訳) 国書刊行会, 524.
- 関川泰寛 (2009) 「伝道する教会の神学的課題—三位一体論と伝道—」『神学』東京神学大学神学会, 71: 49-72.
- 園部不二夫 (1967) 「初代教会における三位一体論 (1)」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』 1: 1-28.
- 高山正之 (2002) 「原理主義の系譜」『帝京大学短期大学紀要』 22: 35-61.
- 谷泰 (1976) 「牧畜文化考—牧夫・牧畜家畜関係行動とそのメタファー—」『人文學報』 42: 1-58.
- (1987) 「西南ユーラシアにおける放牧羊群の管理」福井勝義・谷泰編著『牧畜文化の現象—生態・社会・歴史—』日本放送出版協会, 147-206.
- (1992) 「家畜と家僕—去勢牡誘導羊の地理的分布とその意味—」『人文學報』 71: 53-96.
- (1995) 「家畜去勢と人間去勢—その機能と文化地理的意味—」『大航海』 7: 17-23.
- (1997) 『神・人・家畜—牧畜文化と聖書世界—』平凡社, 396.
- (2010) 『牧夫の誕生—羊・山羊の家畜化の開始とその帰結—』岩波書店, 224, 12.
- 津田謙治 (2013) 「ハルナック『キリスト教の本質』に対するレオ・ベックの批判: 二十世紀ドイツの教義史研究におけるキリスト教本質論の問題」『キリスト教教学研究室紀要』 1: 19-31.
- トインビー, アーノルド (1970) 『歴史の研究 第5巻』(『歴史の研究』刊行会訳) 経済往来社, 312.
- 中川洋一郎 (2017a) 「地球環境の悪化とユダヤ・キリスト教の人間中心主義—文明の (だが, 同時に環境破壊の) 起源としての遊牧—」『経済学論纂 (中央大学)』 57 (3・4): 333-362.
- (2017b) 「群居性草食動物家畜化の衝撃—輪廻転生観の破壊という, 人類史上の分水嶺—」『経済学

- 論纂 (中央大学)』57 (5・6): 257-284.
- (2017c) 「フランスにおける職務間の『隙間』—1990年代初頭, 現地日系メーカー日本人幹部による評価—」『中央大学経済研究所年報』49: 435-458.
- (2017d) 『新ヨーロッパ経済史Ⅰ—牧夫・イヌ・ヒツジ—』学文社, 243.
- (2017e) 『新ヨーロッパ経済史Ⅱ—資本・市場・石炭—』学文社, 293.
- (2018a) 「プラトン《魂の三分》説とデュメジル《三分イデオロギー》説—インド・ヨーロッパ語族民における歴史通貫的な統治原理—」『経済学論纂 (中央大学)』58 (3・4): 313-342.
- (2018b) 「フランスの職務个体化と日本の職務共有化—1990年代初頭, 現地日系メーカー日本人幹部による評価 (2) —」『経済学論纂 (中央大学)』58 (5・6): 287-319.
- (2019a) 「ジョルジュ・デュメジル《三機能性》論, 1950年の蹉跎—神話形成期 (前4千年紀), 原インド・ヨーロッパ語族民組織における社会的三階級の不在という難題—」『経済学論纂 (中央大学)』59 (3・4): 399-433.
- (2019b) 「前4千年紀, 遊牧民としての原インド・ヨーロッパ語族民の生成—狩猟採集民による農牧文化の習得とステップへの進出という起業家的行動—」『経済学論纂 (中央大学)』59 (5・6): 235-272.
- (2019c) 「ジャン・ボダン主権概念の遊牧民的起源—前4千年紀, 遊牧三階層における権力構造とその後の主権概念の展開—」『経済学論纂 (中央大学)』60 (1): 195-226.
- (2019d) 「職務序列表の公示 (1945年) によるフランス企業内三階層の『国定化』—アメリカ・フランスにおける労務管理論の展開—」『中央大学経済研究所年報』51: 171-209.
- (2020) 「遊牧開始という, 組織編成原理史上の分水嶺—前4千年紀, 疑似親族原理から機能本位原理へ—」『経済学論纂 (中央大学)』60 (3・4): 115-149.
- 中野正勝 (2013) 「人間の幸せは, 三一神との, 親子の間柄」『サピエンチア 聖トマス大学論叢』47: 30-60.
- 日本基督教協議会文書事業部 (1985) 『キリスト教大事典 改訂新版第8版』教文館.
- 芳賀力 (2011) 「創造と三位一体」『神学』東京神学大学神学会, 73: 47-64.
- パスモア, ジョン (1998) 『自然に対する人間の責任』(間瀬啓充訳) 岩波書店, 349.
- 半田元夫・今野國雄 (1977) 『キリスト教史Ⅰ』山川出版社, 503, 28.
- フィンク, オイゲン (1983) 『遊び—世界の象徴として—』(千田義光訳) せりか書房, 332.
- ベック, レオ (2011) 「ハルナックの講義『キリスト教の本質』批判 (1901)」(津田謙治訳) 『聖学院大学総合研究所紀要』50: 231-257.
- ベルナルド, ダニエル (1991) 『狼と人間 ヨーロッパ文化の深層』(高橋正男訳) 平凡社, 286.
- ヘロドトス (1972) 『歴史 (中)』(松平千秋訳) 岩波書店, 337.
- ホワイト, デヴィッド=ゴードン (2001) 『犬人怪物の神話』(金利光訳) 工作舎, 416.
- ホワイト, リン (1972) 『機械と神: 生態学的危機の歴史的根源—』(青木靖三訳) みすず書房, 186.
- 松村一男 (2010) 『神話思考Ⅰ 人間と自然』言叢社, 604, 51.
- 宮川俊行 (2011) 「『超自然』の三位一体論的基礎について」『純心人文研究』17: 23-35.
- 宮谷宣史 (2005) 「アウグスティヌスの三位一体論」『神学研究』関西学院大学, 52: 47-60.
- 宮平望 (1991) 「カルヴァンの三位一体論—『キリスト教綱要』を中心として」『基督教研究』53 (1): 18-42.
- (1993) 「テルトゥリアヌスの三位一体論と「所有」概念—「プラクセアス反論」を中心として」『基督教研究』55 (1): 82-107.
- (1994) 「アウグスティヌスの三位一体論と「存在」概念—「三位一体論」を中心として」『基督教研究』55 (2): 200-232.
- モルトマン, ユルゲン (1981) 「社会的三位一体論」(芳賀力訳) 『神学』43: 61-76.

- 山川偉也 (1984) 「文化の論理としてのアナログア—上—ギリシア・ヨーロッパの人間観のマトリクス」『桃山学院大学社会学論集』17 (2): 159-185.
- 山田晶 (1986) 『アウグスティヌス講話』新地書房, 214.
- 山田仁史 (2015) 「犬肉食をめぐるタブーとアイデンティティ」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集 日本文化人類』(0): B14.
- リチャードソン, A. & J. ボウデン編 (1995) 『キリスト教神学事典』教文館, 625.
- ロベス, バリー (1984) 『オオカミと人間』(中村妙子・岩原明子訳) 草思社, 338.
- ADAMS, Robert McC. (2006) Shepherds at Umma in the Third Dynasty of Ur: Interlocutors with a World beyond the Scribal Field of Ordered Vision. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 49 (2): 133-169.
- ANTHONY, David (2007) *The horse, the wheel, and language: how Bronze-Age riders from the Eurasian steppes shaped the modern world*. Princeton, NJ: Princeton University Press. 553.
- CHESSA, B. et al. (2009) Revealing the history of sheep domestication using retrovirus integrations. *Science* 324: 532-536.
- DUCHESNE, Ricardo (2009a) The Aristocratic Military Ethos of Indo-Europeans and the Primordial Origins of Western Civilization. *Comparative Civilizations Review* 60 (60): 11-47.
- (2009b) The Aristocratic Warlike Ethos of Indo-Europeans and the Primordial Origins of Western Civilization—part two. *Comparative Civilizations Review* 61 (61): 13-51.
- (2011) *The Uniqueness of Western Civilization*. Leiden·Boston, 527.
- IVANCIK, Askold (1993) Les Guerriers-Chiens. Loups-garous et invasions scythes en Asie Mineure. *Revue de l'histoire des religions* 210 (3): 305-330.
- LAURANS, R. (1975) Chiens de garde et chiens de conduite de moutons. *Ethnozootechnic* 12: 15-18.
- LEPETZ, Sébastien (1996) L'animal dans l'économie gallo-romaine. *Revue archéologique de Picardie*. Numéro spécial 12, L'animal dans la société gallo-romaine de la France du nord: 81-147.
- MOAZAMI, Mahnaz (2006) The dog in Zoroastrian religion: Videvdad Chapter XIII. *Indo-Iranian Journal* 49: 127-149.
- PETERSON, D. L., L. M. POPOVA, A. T. SMITH (eds.) (2006) *Beyond the Steppe and the Sown: Proceedings of the 2002 University of Chicago, Conference on Eurasian Archaeology*. Leiden · Boston, 548.
- PLANHOL, Xavier de (1969) Le chien de berger; développement et signification géographique d'une technique pastorale. *Bulletin de l'Association de géographes français* 370: 355-368.
- PORTER, Andrew P. & Edward C. HOBBS (1999) The Trinity and the Indo-European Tripartite World-view. *BUDHI* 3 (2-3): 1-28.
- SERGEANT, Bernard (1991) Ethnozoonymes indo-européens. *Dialogues d'histoire ancienne* 17 (2): 9-55.
- (2003) Les troupes de jeunes hommes et l'expansion indo-européenne. *Dialogues d'histoire ancienne* 29 (2): 9-27.
- VILLARD, Pierre (2000) Le chien dans la documentation néo-assyrienne. In: *Topoi. Orient-Occident*. Supplément 2, 2000. *Les animaux et les hommes dans le monde syro-mésopotamien aux époques historiques*: 235-249.